

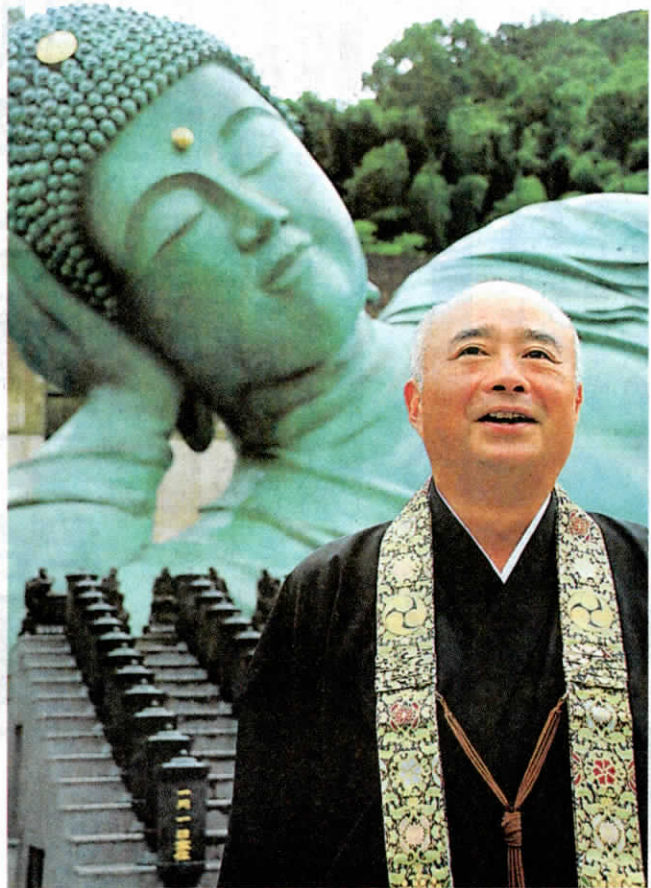
ヒーリングタウン おへんろ道編 ささぐり

したのは「歩きへんろ」ツアー。大半の参加者たちは3〜6月に月1回、日帰りで10〜17札所を巡り、今回の1泊2日ツアーで八十八カ所すべてを回り終えた。福岡市南区の貞金悦子さん(64)は「疲れはあるけど、さすがにいい」と満足そう。

◆ ◆ ◆

第一観光のおへんろツアーの「打ち始め」、すなわちスタートの札所となるのが、1番札所で霊場の総本山・南蔵院だ。篠栗では札所が番号順に道なりに並

心さやかな霊場に



南蔵院の巨大な釈迦涅槃像の前に立つ住職の林覚乗さん

さみとちり取りを持つ。釈迦涅槃像は昨秋、大規模な「化粧直し」を完了。つややかな光沢がよみがえった。韓国・釜山の姉妹寺院・慈悲寺とも交流を深める。現地の招きに応じて釜山の少年院で講演したり、自身のエッセー集を韓国語訳で出版したりした。その縁もあってか、南蔵院には韓国からの観光客も多い。「一つ一つの出会いを大切にしたい結果が今につながった」今後、篠栗霊場はどうなるのか。おへんろさんの高齢化と減少に不安も抱くが、「まだ手は打てる」。各札所の周辺をそれぞれ違う花で彩る、トイレを増やす…。「ここに来ると、さわやかな気分になる。そんな場所を提供し続けたい」

「こまめに水分を取ってくださいね。きついときはおっしゃってください。おんぶしますよ」。若杉山・山頂(681m)の「奥の院」へ向かう急坂の手前。休憩時間を利用し添乗員の山中邦弘さん(36)は約30人のツアー参加者の顔色を観察して回った。明るく声を掛けることで雰囲気や和ませる。弘法大師(空海)を祭る「奥の院」は、篠栗八十八カ所の「番外」という位置付けだが、巡拝コースに組み込むおへんろさんは多い。

旅行会社「第一観光(福岡市博多区)が篠栗のおへんろツアーを企画して今年9年目。バス利用のおへんろもあるが、7月中旬のこの日、山中さんが添乗



総本寺

内。1995年に完成したその姿は町の象徴となり、年間100万人を超す参拝者を集める。名実ともに篠栗霊場の中心的存在だ。その歴史は霊場の初期にさかのぼる。江戸時代末に開かれた篠栗八十八カ所は明治に入り、廃仏毀釈で霊場廃棄の危機に陥った。その後、住民たちの努力で1899(明治32)年、高野山(和歌山県)にあった南蔵院を総本寺として招致することで霊場が存続した。

◆ ◆ ◆

現在の住職は、篠栗に寺院を構え3代目となる林覚乗さん(58)。20代で父の覚雅さん(故人)から引き継いだ。以来、約30年間、斬新なアイデアを実践してきた。

境内の清掃にはひとときわ気を使う。「きれいな境内でないと、再びお参りに来ていただけない」。職員は境内を歩くとき必ず、火はめまします。

◆ ◆ ◆

連載「ヒーリングタウン ささぐり」の「おへんろ道編」は今回で終わり、次回から「森と里の道編」を始める。

街ひと物語

南蔵院の釈迦涅槃像

大きさは、米国・ニューヨークの自由の女神像を横にしたときとほぼ同じ。ミャンマーの仏教会議から、長年の物資支援のお礼として1988年に贈られた仏舎利(釈迦の遺骨)をお祭りするため、建立した。像の中には仏舎利のほか、四国八十八カ所の境内の砂が下に敷かれた石が並び、1枚ずつ踏んで巡拝体験できる。